慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	福沢諭吉関係新資料紹介
Sub Title	New materials : letters from Fukuzawa Yukichi
Author	福沢研究センター(Fukuzawa Memorial Center)
	西澤, 直子(Nishizawa, Naoko)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication	2012
year	
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese
	studies). Vol.29, (2012.),p.383-394
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara id=AN10005325-20120000-0383

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福沢諭吉関係新資料紹介

福沢研究センター

凡例

常用漢字は、原則として現在使用されている字体を用いたが、 慶應義塾など若干の固有名詞に、 原文の字

体を残した。

三、仮名づかいは、原則として原文のままとした。ただし、ひら仮名・かた仮名の判別がつかない文字は、か 二、異体字、俗字、或いは書き誤りと思われる文字は、正体に直した。

た仮名字体で表記した。

四、 変体仮名はひら仮名に改めた。ただし、書簡において助詞として用いられている「は」「て」「え」は、原 漢字の字体で表記されている「者」「而」「江」が助詞として使われている場合には、右の字体を用いた。 文の字形を残し、小活字右寄せで「そ」「あ」「に」のように印刷した。原文が確認できない書簡の場合も、

五、 濁点・半濁点は原文のままとした。

合字は、使用頻度の高いゟ(より)、〆(しめ)は原文の字形を残した。頻度の低い片はトキ、圧はトモ、

つはことと表記した。

t, 句読点は、編者の判断により適宜これを補った。

執筆年月日や発信年月日などを推定でしか示すことができないものには、「カ」を付した。

脱落と思われる文字は、〔〕を付して補った。

九、

十

書簡は、本文の後に【 】を付して書簡の大意を示した。また封筒に関する事項は、 判断されるもののみに限った。

書簡の理解に必要と

候ハ、、

応御逢被下度奉願候。

尚い才ハ本人ゟ可申上、

御聞取奉願候。

早々頓首。

十月十日

I 福沢諭吉書簡

第二十八巻まで通番で付された番号を追うものである。 た。詳しくは『書簡集』第一巻所収の凡例を参照されたい。 十八巻刊行以降見出された書簡を載録する。 福沢諭吉書簡集』(岩波書店 平成十三~十五年 掲載は発信年月日順とし、体裁はすべて『書簡集』 以下『書簡集』と略す)未掲載で、『近代日本研究』第二 なお、 書簡番号は 『書簡集』から『近代日本研究』 の形式に従

六二 中島永元宛 明治十二 (一八七八) 年十月十日付

身分ニ付、 こあらされハ、深き嗜ハ無之候得共、当今之学校用ニも間ニ合可申、若しも此者にゅ可然地位ならバ、 既ニ当塾ニも其話を以て志願之者有之候得共、全体其校之仕組を承知不致ぁハ、人品之適否もさし定難く、 秋冷益御清安被成御座奉拝賀。 ニ爰ニ壹名あり、 周 旋奉願度、 給ハ低くも寧ロ早く地位ニ就き度志願ニ御座候。 尤月給も多きを望まず、 即 チ、 酒井良明と申す者にあ、 陳ハ此程桐野弘ゟ相伺候得て、 四十円カ五十円ニの満足可仕。 随分英書もよく読、 御用繁之御中、 三重学校設立ニ付、 翻訳等も出来可申、 執行中之負債も有之、旁以金を要する 恐縮二不堪候得共、 可然人物御入用之由ニゕ 漢書之方ハ元ト儒生 御都合も宜敷 御採用 試

福沢諭吉

中島先生 梧下

尚以、 桐野弘義も誠ニ御約介罷成、 以御蔭此度之長崎行、 本人おゐて難有存居候次第。尚、小生ゟも宜布御礼

申上呉候様申聞候。以上。

【三重学校の教師として酒井良明を推薦する】

年と推測される。○山本晶「酒井良明を紹介する―中島永元あて福沢諭吉書簡―」(『福沢手帖』第一四九号、二○一一年六 三井呉服店監査役なども務めた。昭和五(一九三○)年歿。○書簡の発信年は、桐野弘を長崎中学校教員に推薦したのが十 これは酒井寄宿舎と呼ばれ、義塾が大規模な寄宿舎を建設する明治三三年まで続いた。教員以外では品川毛織会社取締役や 幼稚舎でも教え、幼稚舎課程修了者のうち希望者二○名ほどを私邸に引き受け、寝食はじめ生活全般の世話と指導をした。 で推挙されている三重県津中学校の教員となり、校長も務めるが、十五年には退職し、翌年から慶應義塾の教員となった。 る。九年卒業後、福沢宅に住み込み、旧福井藩主の長男が慶應義塾に入学すると、その教育係を務めた。十三年にこの書簡 三重県津中学校。○酒井良明は嘉永五(一八五二)年生まれ。福井藩出身で、明治五年に上京し、七年十一月慶應義塾に入 年から務めていた青森県師範学校幹事を辞めた後、福沢が中島に推薦して、長崎中学校の教員となった。○「三重学校」は 国後文部省大書記官、第三高等中学校初代校長を経て、元老院議官、貴族院議員も務める。大正十一(一九二二)年歿。 明治二(一八六九)年大学中助教兼大寮長。四年には文部省七等出仕として岩倉使節団に随行し、欧米各国を歴訪した。帰 ○名宛人の「中島先生」は中島永元。天保十五(一八四四)年生まれ。佐賀瀋出身で、致遠館教官や大阪洋学校校長を経て、 一年七月で、十三年の交詢社の名簿で同人は長崎中学校教員とあることや、酒井の三重赴任が十三年であることから、 "佐賀県歴史人名事典』(洋学堂書店、一九九三年)。○桐野弘は鹿児島藩出身で、明治五年十月から慶應義塾に学ぶ。十一 [封筒表] 西久保城山町四番 中島永元様 福沢諭吉 酒井良明持参 ||孝は水戸出身の士族で福沢邸に住み込み、

などの経営に参画、

日本製鋼所

(現新日本製鉄株式会社)を創立し会長に就任した。

慶應義塾で漢学を講じるとともに、

奉存候。 昨 Ė 尚 ハ 拝 出 則 発前ニモ毎度参上、 趨 此書持参参堂仕候間 は休息中長坐恐縮ニ不堪、 御差図可奉伺宜敷奉願候。 若し御閑も被為在候 様 々御話相 伺 2難有奉存候。 *ا*ر 又乍序申上候。 御逢 奉願 井上も弥再遊と決し、 候。 名越時孝義拝謁之義、 (V オハ本人ゟ可申 今日ゟ少し用意も仕 上 御許容被下 御聞取 被 -難有

聲後何か御教示奉願候。要用而已申上度、早々如此御座候。頓首。

七月十二日

諭

吉

竹添様 梧下

くれるように依頼。また名越時孝との面会を求める】 【井上角五郎 が再度朝鮮に渡ることを決め用意を始めたと告げ、 出発前には竹添のもとに参上するので 「御差図」を与えて

卓蔵の随員として渡朝、 も入学、 福山誠之館や広島県師範学校で学び、明治十二(一八七九)年に上京。 正六(一九一七)年歿。○井上角五郎は万延元(一八六○)年備後国深津郡上村 七年十二月に甲申事変が起り、 中に琉球問題につき李鴻章と交渉した。十五年外務大書記官となり、 仕え、明治八(一八七五)年、修史局御用掛となり、十一年四月以降大蔵省に勤務、 ○名宛人の「竹添様」は竹添進一郎。天保十三(一八四二) 二十三年からは落選や辞職をはさみながら、大正十三(一九二四)年まで衆議院議員を務め、 "漢城旬報』を発刊、 十五年に卒業した。在学中から福沢の紹介で後藤象二郎の秘書役を務め、 続いて初めて漢文・ハ 統理交渉通商事務衙門 処理に苦労した。十八年帰国し、 ングル混合文体を実用化した『漢城周報』 (外衙門) に出仕した。 年天草 同年六月公使を免ぜられた。二十六年外務省を退 (熊本県天草郡大矢野 同年十一月、 十六年十一月に金允植と協力し、 福沢家住み込みの漢学家庭教師となり、 (広島県福山市) 弁理公使として朝鮮へ赴任、 十五年十二月朝鮮政府顧問となった牛場 十三年清国天津在勤領事となり、 の創刊 町) K 生まれ、 かたわら北海道炭礦鉄道会 (十九年) に生まれる。 維新期 朝鮮初の近代的新 に尽力した。 慶應義 在任中の十 号は琢園 は熊本藩 塾に

福沢家の子供たちにも漢学を教えた。

昭和十三

(一九三八)

年歿。

贈っている。○発信年は、前述『漢城旬報』に明治十七(一八八四)年二月に掲載した「華兵凶暴」が在朝清国軍から攻撃 は義塾で英学を学んでいる。のち水戸中学の漢文教師となった。福沢の長男および次男の留学にあたっては、送別の漢詩を 井上が帰国を余儀なくされ、再度朝鮮に渡ることを計画した十七年と考えられる。井上角五郎の自記年譜

듯 三 中村道太宛 明治二十年ヵ六月十二日付

時事新報へ参り、 御都合宜敷候ハ、、 金満家共がやきもちを起したる事と見へ、九十四円ならバ中津ニぁ引受けんと申出したるよし。就ぁは山口之 何れ篤ト承はりて報道可致様、 銀行之者)拙宅へ参り、中村先生之方今二取極出来不致、甚掛念云々申出候ニ付、左様之気遣ハ万々有之間敷 参居候得共、こ、ニ封入不仕、 過日ハ難有奉存候。一同実ニ歓を尽し、私ニおゐても満足仕候。いよ~~今朝十時出発、横浜ゟ井上氏ゟ手紙 ハ、金之事ハ兎も角も、 午後四時過まで同社ニ居る積ニ御座候。 安心出来候樣 山口連の顔が立たぬと申立て引きニ相成候ニ付、甚掛念とて熱心ニ相成候次第。何卒 何れ拝顔万々可申上候。扨中津銀行之義、今朝末貞友年(先日来御目ニ掛り候 御取計奉願候。 明朝ハ岡本貞烋母之葬式ニぁ寺へ参り、 御用も御座候ハ、、 同社に被仰聞被下度奉願候。 夫れゟ午前十時前 同町之

六月十二日

諭

吉

要用而已申上度。

早々頓首

·津銀行」

が株式会社中津銀行のことであるならば、

明治

一十一年の

可能性もある。

しかしながら、

東京での

譲

中村様

-津銀行関係者が心配しているので、

同行への出資を急ぐよう依頼する

はその 郎か。 交詢社創設事務の担当を任され、 抜擢された。 天保十三(一八四二)年に元締方御勘定人に任命された後、 となり、 士に給付された金禄公債を原資として三七○名の株主によって設立されたが、 たことから、 所の頭取に就任するが、 上京、大蔵卿大隈重信の信任を得て、十三年二月横浜正金銀行を設立、 末貞友年は、 『国後は実業界に転じた。大正三(一九一四)年歿。○発信年は第七十八銀行の譲渡の時期から、) 共同経営者となった。)名宛人の 慶応二(一八六六) 二十 年生まれ。 現地責任者として、 明治二十(一八八七)年六月に、福沢は中村道太と共同出資でアメリカに農地を購入し、移民計画に着手し 以後は社会の表舞台には立たなかった。 翌二十一年に東京八王子に移転、 明治二十 常中津銀行とよばれるのは、 一年八月に私立銀行条例による銀行への改組が決定した。 旧中津藩士。 報復を受けたといわれている。大正十(一九二一)年東京で歿し、 「中村様」 明治維新後は県大属、 明 一年創立 治三年 は中村道太。天保七 二十四年に米商会所の仲買人身元金および売買証拠金費消問題が起こった際に、 明治九(一八七六) 年鉄砲洲の塾を訪ね、 〇「山口」は山口広江。文政七 (一八二四) 十五日に渡米している。 小田 である。 原藩の公費生として慶應義塾に入った。 翌年設立後も事務局の中心となった。 小参事を務め、第七十八銀行を設立して頭取を務めていた。 天保義社は十三年ごろから経営をめぐって内部に対立があり 旧中津藩士の互助組織で銀行類似業務も行っていた天保義社の後身である株式会社 中津は支店となった。 (一八三六) 年、 年豊橋に帰り、 福沢と最初に面会してい その失脚の原因は、 ○「中津銀行」はここでは第七十八国立銀行。 財政改革に成功を収め、 第八国立銀 三河国吉田 明治 末貞友年はその改革委員および起草委員に選ばれて 改進党系の中 年生まれ。旧中津藩士で下士階級の出身であったが、 時事新報社では印刷長を務めた。二十六年に渡米 一十二年に誕生した株式会社中津銀行とは別組織。 地方官吏を務めていたが、 初代頭取に就任する。二十一年、 る。 行を創設、 (愛知県豊橋市) 福 その後株主が減少。二十年にはわずか十 沢の 郷里に葬られた。 対が自由党から求められた政治献 翌年渥美郡長。 紹介で早矢仕 慶応四(一八六八) 生まれ。 ○岡本貞恷は嘉永六 有的と知り合 明治 明治十二年末に福沢 組織改革が行 明治十一年に、 十二年福沢にうながされ 江 戸 「井上氏」 ,詰を命じられて出 一十年と推察される。 年には上士階級に 私財を投げ 中村は東京米商会 は井上 旧中津 井上 角五 藩

巻索引参照)。○『大分県史』近代篇1(大分県、一九八四年)、『旧中津藩士族死亡弔慰資金要覧』(三木作次郎編纂発行、 銀行のことであろうと判断した。福沢はほかの書簡においても、第七十八銀行を中津銀行と表現している(『書簡集』第九 を考えていることや、それを中津の「金満家」たちが不服に思い、また「山口連の顔が立たぬ」云々から考えて、第七十八

二二四 後藤象二郎宛 明治二十(一八八七)年ヵ九月十七日付

九二七年)参照

拝啓仕候。陳ハ佐久間山治事、たま~~今日出京致し候ニ付、兎ニ角ニ一応御目通致置候方、都合ならんと存 差出候間、 若し御寸暇も被為在候ハ、、 暫時間御逢奉願候。尚い才ハ本人へ被仰聞被下度奉存候。要用而

九月廿七日

早々頓首拝。

諭

吉

後藤先生 侍史

【後藤象二郎に佐久間(のち武藤)山治を紹介し、面会を求める】

他にも金玉均の援助をはじめ、秘書に慶應義塾生を推薦してもらうなど、親密な交際を続けた。福沢は後藤を高く評価し、 福沢との関係は、明治七(一八七四)年に買収した高島炭鉱が経営難に陥った際、福沢が岩崎弥太郎への譲渡を斡旋した。 慶応三(一八六七)年将軍徳川慶喜に大政奉還を行わせた。明治政府では要職を歴任、民撰議院設立建白書に名を連ねた。 ○名宛人の「後藤先生」は、後藤象二郎。天保九(一八三八)年高知に生まれる。坂本竜馬と共に藩主山内容堂を説得し、

渡米して働きながら学び、帰国後武藤家の養子となる。数社を経て二十七年鐘淵紡績株式会社に入社。 まれる。父から聞いた慶應義塾三田演説館の話にあこがれ、明治十三(一八八○)年五月慶應義塾に入学。十七年卒業後、 「大のひいき」と公言していた。三十年歿。○佐久間山治は慶応三(一八六七)年尾張国松名新田村(愛知県弥富市)に生 一度退社するが、四

+

月二日

-村様

梧下

尚以、

家内かも呉々御礼申上

一候様

单 聞 候。

以上

略申上度、

匆々如此御座候。

頓首。

話』(武藤金太発行、 明治維新後、 ○この書簡は書幅仕立になっており、箱書には いるが、福沢は時折人名を誤って記すので、慣れた佐久間姓を書いた可能性は充分あり得る。十八年一月には渡米している。 せた。十三年から衆議院議員も務め、 十一年に復帰して専務、大正十(一九二一)年には社長に就任する。 政財界腐敗追及記事から昭和九(一九三四)年三月九日、 元老院議官や貴族院議員を務めた。書を能くし、 昭和九年) 中「後藤伯の大同団結と私」による。明治二十年にはすでに武藤家の養子となり改姓して 鐘紡社長 「福沢翁手簡」「素軒叟観首題」とある。「素軒」は野村素介。 (昭和五年) および政界引退 暴漢に銃撃され翌日死去した。 選書奨励会審査長・書道奨励会会頭等も務めている。 家族的な温情主義経営で知られ、 (七年)後、 時事新報社相談役となった。 ○発信年は、 鐘紡の事業を発展さ 長州藩出身で

二五五 中村道太宛書簡 明治二十二年十一月二日付

らんかと談合居候。 候有様二御座候。 大二心痛致居候中、 過日来毎々御尋ニ預り、 如くならず。 是れが一時之小波瀾ニる、 家内一 但し昨朝之熱ハ七度七分まで降りしものが、 其眠 同茫乎として夢の如し。 御心配被成下候病人之義、 ハ昏睡を変して安眠と為り、 別二事を発せざる限りハ、必ス全快と楽み居候。 死刑之宣告を受けて俄ニ放免せら〔れ〕たる者ハ、斯くもあ 昨 昨夜二掛け殆んド絶望、 暁ゟ熱も脈 午後ハ少々昇り、 も呼吸も都て穏にして、先ツ下り坂ニ 遂ニ昏睡ニ陥るならんと医 今朝ハ八度五分にして昨 右御礼旁容体之大

諭 吉

【流行していた腸チフスを発症した長女中村里の病状を伝える】

快癒を喜んで、人から何かよいことがあったのかと尋ねられたら「二二歳の子どもが生まれた」と答えようという漢詩も詠 苦しみを見なくてはいけないなんて、子のない人が羨ましいくらいである。さらにまた全快すると、医師たちの尽力による のときはまた次のような漢詩も詠んでいる。世間の人々は子が多くてめでたいというが、昨晩まで談笑していた子のひどい などを告げ、昏睡状態を脱した安堵感を「死刑宣告を受けて俄ニ放免せら〔れ〕たる者」の気分であると表現している。こ 症し十月三十一日から十一月一日にかけて重篤に陥ったが、一日を境に快方にむかった。この書簡では熱や脈・呼吸の状態 京阪・山陽への家族旅行(九月十六日から十月五日まで)から帰京後、里は当時流行していた腸チフスに罹患。十七日に発 生を得、昭和二十(一九四五)年に亡くなった。富田正文『福沢諭吉の漢詩35講』(福沢諭吉協会、一九九四年)参照。○ 橋誠一郎によれば、兄弟姉妹の中で一番よく福沢の性質を受け継ぎ、「女福沢」と呼ばれていたという。この時は九死に一 八八三)年に福沢の門下生で化学者の中村貞吉(三年六月慶應義塾入学)と結婚、愛作、壮吉の二人の息子が生まれた。高 本人の希望で改名したといわれる。琴やピアノが上手で、また英語もスペリングなどは容易に覚えたという。明治十六(一 ○名宛人の「中村様」は中村道太。前掲云三書簡註。○長女里は、慶応四(一八六八)年の生まれで、はじめ三といったが、 [封筒表] 東京日本橋区南鞘町廿七番地 中村道太様 平安[封筒裏]封 三田

二二六 宛名未詳 発信年月日未詳

んだ。○発信年は内容および封筒消印から、明治二十二年と推定される。

尚以、 寛々御話仕度、 時下為人御自重専一奉存候。乍憚奥様始皆様に御致意奉願。三、 今ゟ相楽罷在候。以上。 四月御出府之頃ハ、千紫万紅之好時節

○尚尚書の内容から考えて、家族ぐるみで親交のある地方名望家か。【家族への伝声と、三、四月の出府を楽しみに待つ旨伝える】

\prod 諸文集

〔旧中津市学校資金よりの海外渡航費貸与に関する覚〕

明治十七(一八八四)年三月九日

試験案文

資金中ゟ百弐十円銀借用致度、 私事今度北米桑港ニ渡り、何か職業を求度志願之処、差向旅費之用意も無之、当惑之次第。就ぁは旧市学校之

して元金を納る而已ならず、目下之恩を謝する為ニハ、大ニ其資本中ニ金を差加る義も可有之候也。……

定

渡米ノ者ハ、英語英文吟味之上、適応ノ者ニ限る事。

仮令適応ノ者アルモ、壱ヶ年五名ニ限る事。

旅費之貸渡しハ、銀貨百円ニ限る事

禄の五分の一(一〇六〇石)と、旧士族間の互助組織である天保義社からの拠出金二万円が充てられた。学則・カリキュラ 「旧市学校」は明治四(一八七一)年十一月に福沢諭吉の提言を受け中津に設立された洋学校。資金は旧藩主奥平家の家

ムは原則として慶應義塾に準じ、また校長の小幡篤次郎をはじめ、主な教職員は慶應義塾から派遣された。明治十年頃まで

を行ったが、結局一六年一月二十四日の会合で閉校が決定した。○中津市学校は閉校が決定した時点で、まだ残余金があり、 幡篤次郎、奥平昌邁ら在京の中津出身者と猪飼麻次郎、山口広江、奥平毎次郎、 は順調に発展したが、西南戦争による経済状況の悪化や他校の成長などにより学生数が減少し、 「事務委員集会」を組織し、 資金の有効運用のための改革を図った。演説会の開催や士族授産のための養蚕事業の推奨など 島津万次郎ら中津にいる人びと計二十名で 一二年には福沢をはじめ小

委員集会は定期的に東京と中津で開催され、東京の結果を中津に知らせ、中津での会合の結果が東京に伝えられ議事が進行 その末尾には別冊二号に続く旨が記されている。今回の資料から閉校後も資金の使途が協議されていたことがわかる。事務 していく体制であった。詳しくは、西沢直子「中津市学校に関する考察」『近代日本研究』一六、慶應義塾福沢研究センター、

その使い道が前述事務委員集会で協議されていた。事務委員集会の議事録は一号のみの内容がわかり(原本の所在は不明)、

一○○年。○この資料は元は額装されており、裏面に飯田三治による次のような説明文が貼られていた。 此記事二枚は、明治十七年三月九日、中津市校東京委員会を福沢先生宅にて開かれたる時、 行費貸与の件を協議せられ、其際先生か記草されたる先生の真蹟なり。当時集会に列席せる飯田平作記す。 中津生徒中にて海外への旅

飯田家は福沢と縁戚関係にある中津藩士で、平作は明治三年十二月慶應義塾に入学。] などの発行に携わった。一九年より三田豊岡町で養鶏を始め、成功をおさめた。 のち慶應義塾出版社に入り、

(西沢直子)